



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



祝福を受けて旅立つ

主任司祭 小西 広志 神父

わたしたち、聖アントニオ修道院は高齢の兄弟たちとともに暮らす修道院です。いつも「いのち」と「死」に隣り合わせにある共同体です。一月二日に兄弟・パスカル藤田銀順神父さまが旅立ちました。つづいて、一月七日には兄弟・ヴィアンネ南雲正晴神父さまが旅立ちました。

わたしは、多くの兄弟たちの旅立ちに立ち会いましたが、この二人の兄弟の旅立ちはとても印象的な出来事でした。その様子を皆さんに少し分かち合いたいと思います。

藤田神父さまは大晦日のあたりから体調を崩されました。新年を迎えてからは何度かお部屋で転倒しました。おそらく、起き上がってトイレに行こうとされたのだと思います。しかし、足に力が入らなかったのでしょうか。

二日のお昼頃、ちょっと様子がおかしいから部屋まで来てください、と井之上神父さまから連絡を受けて行ってみると、呼吸が少し荒かったです。呼びかけにはあまり返答がありませんでした。手指や足指が冷たくなっていました。身体が冷たくなると死期が間近に迫っていることをこれまでの経験で身につけていたので、若い兄弟にその旨をそっとささやきました。

神父さまのお部屋には修道院のほぼすべての兄弟たちが集まっていました。誰もが心配そうに見守りました。間もなく、お世話になっている医療機関のお医者さまが来てくださり、診ていただきました。箱根駅伝のラジオ中継が神父さまの耳元で響いていました。藤田神父さまはマラソンや駅伝を観戦するのが大好きだったのです。午前中からベッドの上で中継に耳を傾けていたのでしょうか。

お医者さまは、大きな病院に救急搬送しましょうという判断をしてくださり、救急車を呼びました。到着するまでの間に井之上神父さまと元田神父さまが病者の塗油の秘跡を授けました。修道院のメンバーは誰一人としてそこを離れませんでした。ほどなくして救急隊がやってきて、手続きをしている間に、藤田神父さまは天の御父の許へと旅立って行かれました。皆に見守られながら、旅立たれたのです。

わたしには不思議な光景でした。兄弟たちが静かに見つめているなかで、息を引き取る方はこれまでなかったからです。かつて福田勤神父さまが書いた本の一節を急に思い出しました。それは、お父さまの死の場面の描写でした。「あっ、死んだ」と枕元に集っていた親戚の誰かが言ったそうです。その言葉、そしてあっけなく死んでいったお父さまを見て、若き日の福田神父さまは「いのち」のはかなさを感じたそうです。

藤田神父さまの最期の場面も同じような感じですが、しかし、「いのち」のはかなさをその時に感じた人はいなかったと思います。つまり、藤田神父さまは祝福を受けて最期を迎えたのです。はかなさと悲しさという感情は、後から、わたしたちにやってきたのです。

藤田神父さまが帰天してから二日後、こんどは南雲正晴神父さまが施設から帰ってきました。およそ二年半、老人施設で過ごしていた南雲神父さまは、旅立ちの日が近づいて修道院に帰ってきました。それは、聖フランシスコが、若いときに飛び出した生まれ故郷のアッシジの町に死を目前にして戻ってきたのと同じでした。

南雲神父さまはストレッチャーに乗せられて修道院に到着しましたが、とてもうれしそうでした。付き添っていた施設の看護師さんも驚くくらいに表情が豊かでした。修道院のメンバー全員でお迎えしました。手を握り、声をかけ、祝福しました。もちろん、南雲神父さまは言葉を発することができません。お口から食事を摂ることもできません。水も無理でした。本当に最期の場面でした。

それでも代わる代わる神父さまの前に兄弟たちは立って声をかけました。すごくうれしそうでした。付き添いの看護師さんが涙を流すほどに、感動的な再会でした。

それから、少しずつ弱っていきました。もはや目を開けることもありませんでした。それでも高齢の兄弟たちは入れ替わり立ち替わりお部屋を訪問しました。こんな時、プラザーの兄弟たちの関わりは熱いと思いました。わたしのような司祭はどちらかと言うとおっかなびっくりですが、プラザーたちはベッドサイドに座って、神父さまをずっと見つめていました。

七日の朝、様子が急変したので、数日前と同じように兄弟たち皆がお部屋に集まりました。そして同じように兄弟たちに見守られながらの旅立ちとなったのです。この時も、悲しいという気持ちはわき上がりませんでした。むしろ、一人の兄弟を天国へと見送ったことの恵みに感謝しました。同じように後から、喪の感情が襲ってきました。

人は旅立つときに人生最大の誘惑を受けると言ったのはF・X・デュルウェルだったと思います。「見放された」、「見捨てられた」、「誰も分かってくれない」という孤立の淵へと墮ちていく誘惑です。仮に多くの親しい人々に囲まれての旅立ちであったとしても、その人の心は誘惑との厳しい闘いにさらされているのでしょうか。

藤田神父さま、南雲神父さま、どちらもわたしたちの祝福の中で旅立ちました。わたしたちフランシスコの兄弟ができる最小で最大のことは祝福です。祝福されて旅立ったこのお二人は、兄弟たちのおかげで誘惑に打ち勝たせてもらって、神さまの許へと向かったのです。美しい死の場面でした。

その後、数日間、お二人の思い出話をしながら食卓を囲みました。これも、わたしには不思議な光景でした。今までにない光景でした。思い出を語りながら、わたしたちは二人の兄弟の姿を再構築して、ここに刻んだのです。

これは喪の体験です。やはり残された人間には喪の時間が必要なのだと改めて思いました。